13　今なんか言った？

すると、その次の日に、カートがぼそぼそと

「ピザ…ありますか」

と言うので、ジョージは笑いながら、

「もともとそっちがザイリョウヒを払ってんだから、何も遠慮（えんりょ）することないじゃない」

と言って、また快くピザを作ってあげた。

カートは、とてもうまそうにジョージのピザを食べた。

次の日も、また次の日もカートはジョージのピザを食べる。［　A　］、カートはすっかりピザの虜（とりこ）になってしまったようだ。

そんな風に数日経ったある日、カートが申し訳なさそうに、ジョージ達に言う。

「監視役（かんしやく）という立場なのに、こんな風においしいものを食べさせてもらって、申し訳ない。これはあくまでナイミツにですが、何か皆さんにお役に立てることはないだろうか」

カートというやつは、どうも義理人情にアツい性格をしているようだ。

「じゃあ釈放（しゃくほう）してくれ」

と答えるマテウスに、

さくらぷりんと®

「それは「　B　」無理です」
という返事だったので、今度はジョージが聞いた。
「じゃあ、誰かにメッセージを送ることはできる？」
「はあ、メルグ星内であれば特に問題はありませんが……しかし、あなたたち地球人に、知り合いがいるんですか？」
ジョージのアイデアを聞いたマテウスが、「　C　」、とつぶやいた。
「ほら、あの船長、なんて名前だっけか？」
「クウニ・ド・ライン艦長に、手紙を出したいと思います」
マテウスがカートに告げた。
（ウニイクラ丼かよ……）
とゴサクは思った。
しかし、マテウスが口に出した名前を聞いて、カートは渋い顔をする。
「クウニ艦長……ですか……」
マテウスは、カートの内心を見透かしたように言う。
「分かりますよカートさん。ホジャーニ派のクウニ艦長は、あなた方とは対立する陣営の人物だ。だから、あなたがクウニ艦長と接触することで、あなたの立場が悪くなる可能性があります。しかし、そこを「　D　」お願いします」
地球人のマテウスが、タリアーイ派とホジャーニ派で対立しているメルグ共和国の内情を知っていることにカートは驚いた。

さくらぷりんと®

「そこまでご存じだったとは……たしかに、私の上官はタリアーイ派なので、クウニ艦長に私が直接会えば、痛くもない腹を探られるはめに……」

「クウニ艦長が無理でも、ドンちゃん……いや、ドン・ケマム・ビツタシンさんでもかまいません」

ニヶ月前、レグルス2号はクウニ・ド・ライン艦長の乗る調査船とビウルジョカ恒星系で出会い、ピザパーティーをした。そのとき、マテウスが一番親しく話したのが『ドンちゃん』である。マテウスがその名を口にしたことで、カートはさらに驚いた後、表情を崩した。

「ドン・ケマム・ビツタシンは、士官学校時代の同級生です。彼ならなんとか連絡を取れますよ」

（マツタケの土瓶蒸しかよ……）

とゴサクは思った。

「今なんか言った？」

とジョージに聞かれたが、「いいえ、別に。」と小さく答えた。

ジョージのピザがきっかけとなり、監視役のカートがメッセージを届けてくれることになった。届けば、何か起こるだろうと四人は期待していた。

そして、それは三日後に起こった。

四人が監禁されている宿舎の前に、大きなバスのような乗り物が止まり、中から出て来たのは『ドンちゃん』だった。

さくらぷりんと®

ドンちゃんは、

「〇〇法第〇条に基づき、捕虜を解放します」

とか、何か難しいことをカートに向かって述べていたようだ。宿舎から解放された四人は、ドンちゃんに連れられてある場所に向かった。

到着したのは軍港のようなところだった。そこにはなんとレグルス２号が、修理されて置いてあるという。

建物の中に通された四人は、クウニ・ド・ライン艦長に会った。

「今回はとんだ災難でしたね。非武装のあなた方を捕虜にした行為は、ほめられたものではありません」

クウニ艦長は四人をねぎらった。

「それにしても、リアーナのやつ、相変わらずひどいことをする……地球の友よ、どうか今回の件で我らメルグ人を嫌わないように頼む」

と頭を下げるので、

「とんでもないことです、クウニ艦長。おかげさまでこうして解放されましたし、始めに正体不明の駆逐艦から攻撃を受けていた小官たちを救ってくれたのはリアーナ艦長であります」

マテウスが取りなした。

とは言え、いきなり駆逐艦を撃沈したのは、やり過ぎであるという意見にはクウニ艦長も同意していた。

「いやな思いをさせてしまった。おわびになるかどうかは分からないが」

さくらぷりんと®

と言いながら、クウニ艦長はスティック状の装置を数本手に乗せて、誇らしげに説明する。

「これは、カクレミニンポーという装置（そうち）です。我々メルグの祖先『ニンジャ』の術を最先端の技術で再現したものです。お役に立てると思いますので、どうかお持ちください」

（いやいや、『ニンジャ』って日本人の祖先なんだけど。）

とゴサクは思った。

「今、なんか言った？」

とジョージがゴサクに聞いたが、ゴサクは小さく首を横に振った。

「お会いする度に、貴重なものをいただいて、心から感謝します。」

マテウスがきちんとお礼を言った。

さくらぷりんと®

14　想定の範囲内

「あとはなんとかする」

そう言ったクウニ艦長の言葉を信じて、四人はレグルス2号に乗り込み、メルグ星を後にした。

トラピスト系第九ステーションに到着するまで、クウニ艦長からもらった『カクレミニンポー』や『ミガワリニンポー』を使ってみた。新しいおもちゃを手に入れた子供のように、ジョージ、キリル、ゴサクの三人ははしゃぎまわって遊んでいる。

『カクレミニンポー』は姿が見えなくなる装置（そうち）だった。マテウス以外の三人は、『透明人間鬼ごっこ』をして盛り上がっていた。

『ミガワリニンポー』は自分そっくりの動く人形が現れる装置（そうち）だった。キリルは、自分そっくりの人形を出して「ショーギ」で勝負をしてみたが、自分のそっくりさんは、まるで相手にならなかった。やはり知能までコピーすることは難しいようだ。

それでもやはり、メルグの技術は圧倒的であると四人は実感した。

そして、第九ステーションに戻ったレグルス2号の四人は、宇宙港に降り立つといきなり警官たちに囲まれた。なんとスパイ容疑で逮捕（たいほ）されてしまったのである。マテウス、キリル、ジョージ、ゴサクは、それぞれ独房（どくぼう）に入れ

さくらぷりんと®

られ、毎日厳しい尋問を受けることになった。

『メルグ星人と結託して、地球軍の駆逐艦を撃沈した』

これが、彼らにかけられた容疑である。

駆逐艦にいきなり攻撃されたのはマテウス達の方である。もちろん、根も葉もないことである。非武装の味方の船であるレグルス2号を、有無を言わさず攻撃してきた駆逐艦こそ断罪したいくらいだ。しかし、その駆逐艦はメルグの巨大戦艦が跡形もなく撃沈してしまってすでにこの世にはない。

四人はそれぞれに、自分たちの無実を主張したが、取り調べでは聞く耳を持ってくれなかった。

軍法会議でも同様だった。

中でもマテウスは、レグルス2号が攻撃を受け、メルグの戦艦に救助されるまでのデータを証拠として提出しようとしたが、驚いたことに、データの提出そのものが認められなかった。

その理由は、

「データそのものが作られたものである可能性がある」

という言いがかりに近いものであった。

まるで、結論があらかじめ決まっていて、取り調べや軍法会議は、形式上の建前をとりつくろうために行っているようなものだった。

ついに、レグルス2号の四人は、刑務所に入れられてしまった……はずだった。

さくらぷりんと®

四人が刑務所に入ったはずのその日、マテウス、キリル、ジョージ、ゴサクの四人は、第九宇宙ステーションの繁華街の中にある、つぶれかけの居酒屋に集合していた。

彼らは、クウニ艦長からもらったミガワリニンポーとカクレミニンポーを使って脱出したのだ。つまり、今刑務所にいるのは、にせもののマテウス、キリル、ジョージ、ゴサクである。ミガワリニンポーを使うと、本人そっくりの人形が現れる。それも単なる人形ではなく、簡単な会話や日常生活をこなしてくれる。刑務所なら、牢屋の中でじっとしている時間が長い。そう簡単にはばれないだろう。

「ミガワリニンポーは、一週間はもつそうだ」

キリルが説明する。

ビウルジョカ恒星系で、味方と思われた地球の駆逐艦に攻撃を受けた後、マテウスはこの事態を予想していた。「これは最悪のケースだが」と前置きして他の三人に語ったことはこうであった。

「駆逐艦があの場所で我々を攻撃してくるのは、レグルス２号の存在が邪魔だと思っている者が軍の内部にいるということだ。しかし、駆逐艦は撃沈され、我々が生き残った。我々を邪魔者だと思っている連中は、今度は我々を駆逐艦撃沈の犯人に仕立てようとするに違いない。したがって、地球に戻ったら、おれたちはまたどこかへぶち込まれるだろう」

〔　Ｅ　〕、レグルス2号の四人にとってこの事態は想定の範囲内であっ

さくらぷりんと®

た。

だから、ミガワリニンポーを使って刑務所に入れられるのを回避したのも、この居酒屋に集合したこともすべて作戦通りであった。作戦立案は、キリルが『酒を飲んでいないときに』考えたものだった。つまり、作戦は完璧であった。

「それで、この後どうするのだ」

ビールを片手に、マテウスが聞くと、これまで情報収集に走り回っていたキリルが

「残念ながらマテウス、おれたちを刑務所にぶちこもうとした黒幕はビジャイ中将だ」

「そんな……」

「マテウス、これは確かな情報だ。お前さんはビジャイ中将をずいぶん信用していたようだが、恐らく、これからおれたちを助けてくれるのはライトナー中将の方だ。うまくだまされちまったな」

マテウスは、ビジャイ中将こそメルグ星人との同盟を推進する重要人物だと考えていた。反対にライトナー中将は同盟を阻止しようとする抵抗勢力であり、キョブ星人と裏でつながっている可能性まで考えていた。

「キリル。それは本当なのか？　おれの考えは逆だったということか」

マテウスは、信じられない思いでキリルに問いかける。

さくらぷりんと®

「ああ、本当だ。おれがかき集めた情報を総合すると、こないだおれたちに攻撃してきた駆逐艦も、ビジャイ中将の命令だと考えればすべてのつじつまが合う。なあ、マテウス。以前に、この艦の防御ユニットの件は覚えているか？」

キリルが言っているのは、以前にレグルス２号に最新の防御ユニットを装備するかどうかで、ライトナー中将が反対したという噂のことだ。

「実は、あのときに防御ユニットの装備に反対したのはビジャイ中将の方で、ライトナー中将はむしろ賛成していたそうだ。おれたちは真逆の情報に踊らされていたのさ」

「そうだったのか……」

マテウスにとっては少なからず衝撃であるが、ここは切り替えるしかない。

「私は、これからライトナー中将に連絡をとろうと思う」

「おれたち本来は刑務所にいるはずの人間だ。分かっちゃいると思うが気を付けてな」

キリルが真面目にマテウスに注意を促した。

四人はさらにひそひそと作戦会議を続けた。

さくらぷりんと®

15　まあ、おもちゃなんだけどね

数日後、四人は同じ居酒屋（いざかや）に集合した。店主にお金をたっぷり払って、その日は貸し切りにしてもらった。

まずマテウスの報告が始まった。

「ライトナー中将からの密書（みっしょ）を預（あず）かった」

「本当に会えたんですか。それにしても、よく会っていただけましたね」

ゴサクが驚いた顔をしたが、マテウスはいつものように冷静に続けた。

「ライトナー中将には、『君たちしかいない』と言われた。この密書（みっしょ）をメルグ星に届けることで、地球連邦とメルグ星の同盟に道が開けるかもしれない」

「そんなバカみたいに大事な仕事をおれたちにまかせちゃっていいのかよ」

ジョージがニヤニヤしながら、突然立ち上がり、直立して敬礼のポーズをとる。

「いいか、ゴサク。たぶんこうだぞ」

ジョージの一発芸、『マテウスの物まね』である。

「『ラッ、ライトナー中将！　しょっ小官の命に代えてでも、この密書（みっしょ）をメルグ星へ届けましゅっ！』ってな」

あまり似てはいないのだが、ゴサクとキリルは腹をかかえて笑う。

「やめろジョージ。まだ問題がある。この後、おれたちはどうやってレグル

さくらぷりんと®

ス2号に乗り込むかだ」

レグルス2号は、宇宙港にある。宇宙港は、軍が管理している施設(しせつ)だ。簡単には入れない。入れたとしても、レグルス2号がある場所まで無事にたどり着けるとは思えない。

「まいったね」

キリルがお手上げポーズをとった。

マテウスは、他の三人の顔を交互に見ながら言った。

「自分は、たとえ一人でもメルグ星に行くつもりだ。これはきっと命がけになる。というか多分死ぬ。それでもよければ、明日二十時に宇宙港の正面入口に集合してくれ」

つまり、マテウスは正面(しょうめん)トッパをするつもりのようだった。

「頭悪い作戦だね」

「マテウスさんらしくありませんね」

ジョージとゴサクが笑った。

「どうで死ぬ身のひと踊りってやつか。がははは」

キリルがグラスの酒を飲み干すと、他の三人も続いた。

このときの四人……いやキリルを除く三人は、本当に明日が自分の命日になると思っていた。

宇宙港の正面入口の警備(けいび)はそれほど厳重(げんじゅう)ではない。大きな門は開けっ放

さくらぷりんと®

しで、門の左右に守衛が一人ずつ立っている。

マテウス、ジョージ、キリル、ゴサクの四人は、モデルガンを片手にその門の前に立つ。

銃を手にした人間がいるのなら、守衛は対応しないといけない。ライフル銃を背中にしょった右側の守衛が、マテウス達を見ると、あわてた様子で左側のもう一人の守衛に駆け寄って何か耳打ちをしている。

そして、二人の守衛は、ちらちらとこちらを見たかと思うと、マテウス達に近づいてくる。ライフル銃は背負ったままである。

マテウス達は、入口に向かってどんどん進んでいくのだが、近づいてくる二人の守衛には、マテウス達を警戒する様子が感じられない。そして、マテウス達の前に立ち、なんと敬礼をするではないか。

「カール・マテウス・シュルツェン大尉とお見受けいたします」

意外な展開にやや面食らったマテウスだが、手に持ったモデルガンをポケットに突っ込んで敬礼を返す。

「いかにも、小官がマテウス・シュルツェンです」

するともう一人の守衛が、

「レグルス2号までご案内いたします。どうか銃をお納めください」

と言ったので、ジョージが笑いながら

「まあ、おもちゃなんだけどね」

と銃を守衛に渡した。

さくらぷりんと®

四人は二人の守衛にはさまれるように宇宙港内に入る。

すると、マテウス達を護衛するように、ライフル銃を持った兵士たちが、どんどん周りに集まってくる。

軍港内の兵士の先導を受けながら、マテウスの脳内では状況分析が始まっていた。

「これは、おそらくライトナー中将が手を回してくれたに違いない。この軍港での無用な争いを避けるためだ。ライトナー中将は『君たちしかいない』と言って、私にメルグ星への密書を預けた。ならば、これくらいの露払いは当然のことかもしれない。逆に、ライトナー中将の立場からすれば、『君たちしかいない』と密書を預けながら、我々がレグルス2号に乗れる状況を作らないのも筋が通らない。だとしたら、とくに命を捨てる覚悟をしなくても、密書を託された時点でこの状況を予測できたのではないだろうか。なんで自分はこんな簡単な予測もできずに、安易に正面トッパなどという提案をしてしまったのだろうか。私としたことが、これは知的怠慢に他ならないではないか。というか、こんな簡単な予測を怠って、みなに『命をかけてくれ』なんて言って、〔　Ｆ　〕『これが最後の晩餐になるかもな』みたいな感傷にひたって他の三人と乾杯したのがバカみたいじゃないか。キリルまで『どうで死ぬ身のひと踊り』などと言って……はっ！　キリルめ……あいつの頭脳だったら、今日の事態は予測できていたのではないか。いやいや、あいつは昨晩たしか酒を飲んでいた。酒を飲んでいるときのキリルなんて、ただのバカ

さくらぷりんと®

じゃないか。それとも、キリルのやつ、私の判断ミスに気が付いていながら、『酒さえ飲めたらなんでもいいじゃない』ってノリだった可能性が非常に高いぞ。いや、きっとそうに違いない。だとしたら……」

「おい、マテウス。さっきから何をブツブツ言ってんだ？」

キリルに声をかけられて、マテウスはぎょっとしてキリルを見た。いつも酔っぱらってにやにやしているキリルだが、今は酒を飲んでいない。その引き締まった表情、少し緑がかった青い瞳と目を合わせていると、こちらの心の中がすべて見抜かれてしまうように思って、マテウスは目をそらせた。

「いや……何でもない」

「どうせ、判断ミスったとか思ってるんだろ？　なあ、マテウス。いいんじゃないかな。結果オーライで」

言いながら、キリルはマテウスよりも先にレグルスの方へ歩いて行った。

四人がレグルス2号に乗り込み、出港しようとするときには、数十人の兵士が集まっていた。彼らは手を振りながら、レグルス2号の出港を見送った。

宇宙空間に出ても、追手はかからなかった。

「何度も死ぬ覚悟をしてきたわりには、なかなか死なせてくれないもんだ」

しみじみと言うキリルの言葉に、他の三人も苦笑いを浮かべながらうなずいていた。

さくらぷりんと®